

MIPS算術論理演算命令とレジスタ

■ 算術論理演算命令は3オペランド

▶ add, sub, mult, div, and, or,...

■ オペランドの順序は固定

▶ 結果は第1オペランドに格納される

▶ add \$1,\$2,\$3 ; \$1=\$2+\$3

■ 転送系は2オペランド

▶ 例 lw \$s1,100(\$2)

■ 条件分岐系は3オペランド

▶ 例 beq \$1,\$2,25

■ 絶対ジャンプ系は1オペランド

▶ 例 j 2500

■ レジスタ

▶ CPUの内部にあるデータの格納場所

▶ メモリと比べて2桁以上高速に参照できる

▶ 限られた数しかない (MIPSは32個)

■ MIPSのレジスタ名とレジスタ番号

Name	Register number	Usage
\$zero	0	the constant value 0
\$v0-\$v1	2-3	values for results and expression evaluation
\$a0-\$a3	4-7	arguments
\$t0-\$t7	8-15	temporaries
\$s0-\$s7	16-23	saved
\$t8-\$t9	24-25	more temporaries
\$gp	28	global pointer
\$sp	29	stack pointer
\$fp	30	frame pointer
\$ra	31	return address

レジスタを使ったアセンブリ・プログラムの例

■ Cステートメント (C言語のプログラム、コード)

f = ( g + h ) - ( i + j );

▶ 変数とレジスタの割当 f:\$s0, g:\$s1, h:\$s2, i:\$s3, j:\$s4

— 一時格納場所として\$t0と\$t1を使う。

— t は temporal (一時的) の t を意味する

■ MIPSコード (アセンブリ、プログラム)

add \$t0,\$s1,\$s2 # \$t0 = f+g  
add \$t1,\$s3,\$s4 # \$t1 = i+j  
sub \$s0,\$t0,\$t1 # f = \$t0 - \$t1

■ 配列はどのように実現するか？

問題のパターン

C 言語のプログラム

変数とレジスタの割当て

MIPSコード

適切なコメントを書くこと  
正しいコメントは評価する。

MIPSのメモリ

■ 巨大な1次元の配列

▶ 4番地の内容 Memory[4]

■ MIPSはバイトアドレッシング

▶ 2<sup>32</sup>バイトあるいは2<sup>30</sup>ワード

12345678<sub>16</sub>

バイト

0	12
1	34
2	56
3	78

ハーフワード

0	1234
2	5678
4	
6	

ワード

0	12345678
4	
8	
C	

ワード単位でメモリを見れば、  
4番地ごとに見える

データ転送命令

■ データ転送命令

▶ メモリとレジスタの間でデータを転送する命令

■ ロード命令とストア命令

▶ オペランドはメモリアドレス

▶ 100(\$s3)

– レジスタ\$s3の内容に100を加えた値をアドレスとする

■ ロード命令 lw \$s0,100(\$s3)

▶ メモリからレジスタへデータを転送する命令

■ ストア命令 sw \$s0,100(\$s3)

▶ レジスタからメモリへデータを転送する命令

■ lwとswの使い方

▶ レジスタ\$s3:100

■ 100番地の内容を\$t0に格納する

▶ lw \$t0,0(\$s3) # 100+0

■ 104番地の内容を\$t0に格納する

▶ lw \$t0,4(\$s3) # 100+4

■ \$t0の内容を100番地に格納する

▶ sw \$t0,0(\$s3) # 100+0

■ \$t0の内容を104番地に格納する

▶ sw \$t0,4(\$s3) # 100+4

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

C言語からアセンブリ言語

■ Cステートメント a = b + c

■ 整数型変数a, b, cはメモリ上にあるとする

▶ aは100番地, bは104番地, cは108番地

■ レジスタ\$s3には100が格納されている.

■ レジスタ\$zeroは0が格納されている.

■ MIPSコード (解答例1, ○)

lw \$s0,4(\$s3) # \$s0 = b

lw \$s1,8(\$s3) # \$s1 = c

add \$s2,\$s0,\$s1 # \$s2= b+c

sw \$s2,0(\$s3) # a = \$s2

■ MIPSコード (解答例2, △)

lw \$s0,104(\$zero) # \$s0 = b

lw \$s1,108(\$zero) # \$s1 = c

add \$s2,\$s0,\$s1 # \$s2= b+c

sw \$s2,100(\$zero) # a = \$s2

\$s3→100

104

108

変数a

変数b

変数c

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

ロード・ストアアーキテクチャ

■ データをメモリからレジスタにロードする.

■ レジスタを使って計算する

■ 計算結果をレジスタからメモリにストアする

CPU

\$s01

\$s12

add \$s2,\$s0,\$s1

\$s23

メモリ

1

2

3

lw \$s0,0(\$s3)

lw \$s1,4(\$s3)

sw \$s2,8(\$s3)

\$s3→100

104

108

a:1

b:2

c:0

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

配列とload命令とstore命令

配列A[]	load命令	store命令
■ A[] のベースアドレス \$s3	■ Cステートメント g = h + A[8]; ▶ g: \$s1, h: \$s2	■ Cステートメント A[12] = h + A[8]; ▶ h: \$s2
\$s3 → A[0]	■ MIPSコード lw \$t0, 32(\$s3) add \$s1, \$s2, \$t0	■ MIPSコード lw \$t0, 32(\$s3) add \$t0, \$s2, \$t0 sw \$t0, 48(\$s3)
+4 A[1]		
+8 A[2]		
+12 A[3]		
+16 A[4]		
+20 A[5]		
+24 A[6]		
+28 A[7]		
+32 A[8]		
+36 A[9]		
+40 A[10]		
+44 A[11]		
+48 A[12]		

配列のインデックスが変数の場合

<p>■ <b>Cステートメント</b></p> <pre> g = h + A[i]; ▶ 配列A[] のベースアドレス : \$s3 ▶ g:\$s1, h:\$s2, i:\$s4 </pre> <p>■ <b>配列A[]のアドレス &amp;A[i] を計算する</b></p> <pre> ▶ &amp;A[i] は  &amp;A[0]+4*i   である, </pre> <p>■ <b>iを4倍する方法</b></p> <pre> ▶ iを4回加算する  i+i+i+i ▶ iの2倍を2回加算する  (i+i)+(i+i) add \$t1,\$s4,\$s4 # \$t1=i+i=2*i add \$t1,\$t1,\$t1 # \$t1=2*i+2*i </pre>	<p>■ <b>MIPSコード</b></p> <pre> add \$t1,\$s4,\$s4 # \$t1=2*i add \$t1,\$t1,\$t1 # \$t1=4*i add \$t1,\$t1,\$s3 # \$t1=&amp;A[0]+4*i lw \$t0,0(\$t1)   # \$t0=A[i] add \$s1,\$s2,\$t0 </pre> <p>■ <b>4倍 教科書ではシフトを使う  i&lt;&lt;2</b></p> <p>■ <b>5倍</b></p> <pre> add \$t1,\$s4,\$s4 # 2倍 add \$t1,\$t1,\$t1 # 4倍 add \$t1,\$t1,\$s4 # 5倍 add \$t1,\$t1,\$t1 # 10倍 </pre>
---	---

即値（そくち, immediate）のオペランド

■ C言語のプログラムで使われる小さな定数

```
i = i + 1 ;
```

▶ i: \$s3

■ 命令セットの設計方針

- ▶ 一般的な場合を高速化せよ.
- ▶ 小さければ小さい程になる.

■ アセンブリ言語に変換

▶ 定数の表を使う方法

```
lw $t0, 8($s1)
add $s3,$s3,$t0 # $s3=$s3+3
```

▶ 定数の表を用意しないといけない.

▶ 小さな定数はよく使われるので、その度に  
lw命令を使うのは遅くなる.

■ 即値命令 (immediate)

```
addi $s3,$s3,1 # i=i+1
addi $s3,$s3,-1 # i=i-1
```

▶ subiはないよ！

■ 即値オペランド

- ▶ 16ビットの符号付整数
- ▶ 値の範囲:  $-2^{15} \sim 2^{15}-1$
- ▶ -32,768 ~ 32,767

定数の表

1
2
3
4
...

符号拡張

- 即値命令 (immediate)  
addi \$s3,\$s3,1 # i=i+1
  - ▶ レジスタは32ビット
  - ▶ 即値オペランドは16ビット
- 32ビットと16ビットの加算
  - ▶ 16ビットの整数を32ビットに変換する
    - 符号拡張

- 符号拡張
  - ▶ 符号ビットの写しで拡張する
- 8ビットを符号拡張して16ビットに変換する
  - ▶ (00001111)→  
(0000000000001111)
  - ▶ (10000010)→  
(111111110000010)
- ビット数が変わっても、数ならば、正数は正数、負数は負数に変換しないといけないので、極めて自然な考え方である。
- 数でないので、論理命令は符号拡張しない。

アセンブリ言語から機械語への変換

- アセンブリ言語  
add \$t0, \$s1, \$s2
- レジスタ名をレジスタ番号に変換する  
add \$8, \$17, \$18
  - ▶ \$t0:8, \$s1:17, \$s2:18
- add命令のOPコードを調べる
  - ▶ add 0=(000000)<sub>2</sub>
  - ▶ func 32=(100000)<sub>2</sub>
- 3つのレジスタ・オペランド
  - ▶ rd: destination 結果を格納する
  - ▶ rs: source 計算に使うレジスタ
  - ▶ rt: t is next to s. 計算に使うレジスタ

- 機械語
    - ▶ 32ビット長
    - ▶ 6つのフィールド
- |    |    |    |    |       |      |
|----|----|----|----|-------|------|
| 6  | 5  | 5  | 5  | 5     | 6    |
| op | rs | rt | rd | shamt | func |
| 0  | 17 | 18 | 8  | 0     | 32   |
- 000000 10001 1001001000 0000 100000
- 0000 0010 0011 0010 0100 0000 0010  
0000=(0232402)<sub>16</sub>

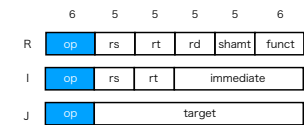
アセンブリ言語から機械語への変換

- アセンブリ言語  
add \$t0, \$s1, \$s2
- レジスタ名をレジスタ番号に変換する  
add \$8, \$17, \$18
  - ▶ \$t0:8, \$s1:17, \$s2:18
- add命令のOPコードを調べる
  - ▶ add 0=(000000)<sub>2</sub>
  - ▶ func 32=(100000)<sub>2</sub>

- 機械語
    - ▶ 32ビット長
    - ▶ 6つのフィールド
- |    |    |    |    |       |      |
|----|----|----|----|-------|------|
| op | rs | rt | rd | shamt | func |
| op | rs | rt | rd | shamt | func |
| 0  | 17 | 18 | 8  | 0     | 32   |
- 000000 10001 10010 01000 0000 100000

MIPS命令セット

■ 3つの形式 (R, I, J)



- op 6ビットのオペコード
- rs 第1ソースオペランドのレジスタの指定
- rt 第2ソースオペランドのレジスタの指定
- rd デスティネーションオペランドのレジスタの指定

■ immediate 16ビットのイミディエト  
分岐ディスプレイスメント  
アドレスディスプレイスメント

■ target 26ビットの無条件分岐ターゲットアドレス (j命令)

■ shamt 5ビットのシフト量

■ funct 6ビットの機能フィールド

MIPS命令の符号化

命令	形式	op	rs	rt	rd	shamt	funct	address
add	R	0	レジスタ	レジスタ	レジスタ	0	32	適用せず
sub	R	0	レジスタ	レジスタ	レジスタ	0	34	適用せず
addi	I	8	レジスタ	レジスタ	適用せず	適用せず	適用せず	定数
lw	I	35	レジスタ	レジスタ	適用せず	適用せず	適用せず	アドレス
sw	I	43	レジスタ	レジスタ	適用せず	適用せず	適用せず	アドレス

- レジスタ (5ビット) 0から31までのレジスタ番号
- アドレス (16ビット)
- 適用せず 該当命令形式にない
- R形式について
  - ▶ add命令とsub命令のopフィールドの値は共に0で同じである。
  - ▶ functが32ならばadd, 34ならばsubである。

C言語からアセンブリ言語, アセンブリ言語から機械語

■ Cステートメント

A[300]=h+A[300]

- ▶ 配列A[]のベースアドレス: \$t1
- ▶ h: \$s2

■ アセンブリ言語 (レジスタ名)

lw \$t0,1200(\$t1)  
add \$t0,\$s2,\$t0  
sw \$t0,1200(\$t1)  
▶ \$t1: 9, \$t0: 8, \$s2: 18

■ アセンブリ言語 (レジスタ番号)

lw \$8,1200(\$9)  
add \$8,\$18,\$8  
sw \$8,1200(\$9)

■ アセンブリ言語から機械語

op	rs	rt	rd	shamt	funct
35	9	8	1200		
0	18	8	8	0	32
43	9	8	1200		

■ 機械語を2進数に変換

op	rs	rt	rd	shamt	funct
100011	01001	01000	00000100101	10000	
000000	10010	01000	01000	00000	1000000
101011	01001	01000	00000100101	10000	

■ 16進数に変換

8d2804b0  
02484020  
ad2804b0

論理演算とMIPS命令

論理演算	Cの演算子	Javaの演算子	MIPS命令
左シフト	<<	<<	sll
右シフト	>>	>>>	srl
ビット単位のAND	&	&	and,andi
ビット単位のOR			or,ori
ビット単位のNOT	~	~	nor

■ sll : shift left logical    論理左シフト    ■ andi/ori の i は immediate を意味する

■ srl : shift right logical    論理右シフト

■ nor : not or

■ javaの ">>" は算術右シフトである。

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

シフト演算

左シフト

■ 1ビット左シフト   2倍  
■ 2ビット左シフト   4倍  
■ nビット左シフト   2<sup>n</sup>倍

00110010  
0← 01100100 ←0  
0← 11001000 ←0  
1← 10010000 ←0  
1← 00100000 ←0  
0← 01000000 ←0  
0← 10000000 ←0  
1← 00000000 ←0  
0← 00000000 ←0

右シフト

■ 1ビット右シフト   半分?  
▶ 半分にはならない

00110010  
0→ 00011001 →0  
0→ 00001100 →1  
0→ 00000110 →0  
0→ 00000011 →0  
0→ 00000001 →1  
0→ 00000000 →1  
0→ 00000000 →0  
0→ 00000000 →0

使い方

■ \$s4の4倍を計算する方法  
▶ 2ビット左シフト  
sll \$t1,\$s4,2  
— 1命令で速い  
▶ 2倍+2倍  
add \$t1,\$s4,\$s4  
add \$t1,\$t1,\$t1

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

MIPSの論理演算命令

■ R形式   sll \$t2,\$s0,4  
sll \$t0,\$t1,4  
▶ shamt:shift amount  
▶ (00105100)<sub>16</sub>

00000000000100000101000100 00000

■ R形式   and \$t0,\$t1,\$t2  
■ I形式   andi \$t0,\$t1,3328<sub>10</sub>  
■ R形式   or \$t0,\$t1,\$t2  
■ I形式   ori \$t0,\$t1,15360<sub>10</sub>  
■ R形式   nor \$t0,\$t1,\$t3

6   5   5   5   5   6

op   rs   rt   rd   shamt   funct

0   0   16   10   4   0

6   5   5   5   5   6

R   op   rs   rt   rd   shamt   funct

I   op   rs   rt   immediate

J   op   target

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

### nor命令によるnot演算

■ `not $s0 = nor $s0,$s0,$zero`

■ `nor $s0,$zero,$s1 # $s0=!$s1`  
`nor $s0,$s1,$zero # $s0=!$s1`

■ NOR演算

X	Y	X nor Y
0	0	1
0	1	0
1	0	0
1	1	0

■ Yがゼロなら, `not X = X nor 0`

X	Y	X nor Y
0	0	1
1	0	0

■ Xでもゼロなら, `not Y = 0 nor Y`

X	Y	X nor Y
0	0	1
0	1	0

### AND演算の使い方 (1)

■ ワード中の特定のビットを取り出す

X	Y	X and Y	備考
0	0	0	0になる
0	1	0	Xの値
1	0	0	0になる
1	1	1	Xの値

■ `$t2`の下から3バイト目を取り出す.

■ マスクパターン `$t1=(00000F00)16`

▶ 残したいビットに該当するビットを1にする

■ `and $t0,$t2,$t2`

`$t2` 0000 0000 0000 0000 0000 0000 **1101** 1100 0000  
`$t1` 0000 0000 0000 0000 0000 0000 **1111** 0000 0000  
`$t0` 0000 0000 0000 0000 0000 0000 1101 0000 0000

■ `srl $t0,$t0,8`

`$t0` 0000 0000 0000 0000 0000 0000 0000 **1101**

### AND演算の使い方 (2)

■ 特定のビットを0にする

X	Y	X and Y	備考
0	0	0	0になる
0	1	0	Xの値
1	0	0	0になる
1	1	1	Xの値

■ マスクパターン `$t1=(000000FF)16`

▶ 0にしたいビットの該当するビットを0にする  
 それ以外のビットは1にする

■ `and $t0,$t2,$t2`

`$t2` 1010 1100 0101 1111 0011 1001 1100 1101  
`$t1` **0000** **0000** **0000** **0000** **0000** **0000** 1111 1111  
`$t0` 0000 0000 0000 0000 0000 0000 1100 1101

OR演算の使い方

■ 特定のビットを1にする

X	Y	X or Y	備考
0	0	0	Xの値
0	1	1	1になる
1	0	1	Xの値
1	1	1	1になる

■ パターン \$t1=(000000FF)<sub>16</sub>

▶ 1にしたいビットの該当するビットを1にする  
それ以外のビットは0にする

■ or \$t0,\$t2,\$t2

\$t2 1010 1100 0101 1111 0011 1001 1100 1101  
\$t1 0000 0000 0000 0000 0000 0000 1111 1111  
\$t0 1010 1100 0101 1111 0011 1001 1111 1111

論理演算の使い方

■ 1ワードは4バイト、1文字は1バイト

■ "ABC"から1文字`c`を取り出し、小文字の`c`に変換する

\$t2="ABC"  
8ビット右シフト  
AND演算  
OR演算  
大文字`c`から小文字`c`

0100 0001 0100 0010 0100 0011 0000 0000  
0000 0000 0100 0001 0100 0010 0100 0011  
0000 0000 0000 0000 0000 0000 1111 1111  
0000 0000 0000 0000 0000 0000 0100 0011  
0000 0000 0000 0000 0000 0000 0010 0000  
0000 0000 0000 0000 0000 0000 0110 0011

ASCII文字コード

文字	コード 10進 16進	文字	コード 10進 16進	文字	コード 10進 16進	文字	コード 10進 16進	文字	コード 10進 16進	文字	コード 10進 16進	文字	コード 10進 16進	文字	コード 10進 16進
NUL	0 0x00	DLE	16 0x10	SP	32 0x20	0	48 0x30	@	64 0x40	P	80 0x50	^	96 0x60	p	112 0x70
SOH	1 0x01	DC1	17 0x11	I	33 0x21	1	49 0x31	A	65 0x41	Q	81 0x51	a	97 0x61	q	113 0x71
STX	2 0x02	DC2	18 0x12	**	34 0x22	2	50 0x32	B	66 0x42	R	82 0x52	b	98 0x62	r	114 0x72
ETX	3 0x03	DC3	19 0x13	#	35 0x23	3	51 0x33	C	67 0x43	S	83 0x53	c	99 0x63	s	115 0x73
EOT	4 0x04	DC4	20 0x14	\$	36 0x24	4	52 0x34	D	68 0x44	T	84 0x54	d	100 0x64	t	116 0x74
ENQ	5 0x05	NAK	21 0x15	%	37 0x25	5	53 0x35	E	69 0x45	U	85 0x55	e	101 0x65	u	117 0x75
ACK	6 0x06	SYN	22 0x16	&	38 0x26	6	54 0x36	F	70 0x46	V	86 0x56	f	102 0x66	v	118 0x76
BEL	7 0x07	ETB	23 0x17	'	39 0x27	7	55 0x37	G	71 0x47	W	87 0x57	g	103 0x67	w	119 0x77
BS	8 0x08	CAN	24 0x18	(	40 0x28	8	56 0x38	H	72 0x48	X	88 0x58	h	104 0x68	x	120 0x78
HT	9 0x09	EH	25 0x19	)	41 0x29	9	57 0x39	I	73 0x49	Y	89 0x59	i	105 0x69	y	121 0x79
NL*	10 0x0a	SUB	26 0x1a	*	42 0x2a	:	58 0x3a	J	74 0x4a	Z	90 0x5a	j	106 0x6a	z	122 0x7a
VT	11 0x0b	ESC	27 0x1b	+	43 0x2b	;	59 0x3b	K	75 0x4b	[	91 0x5b	k	107 0x6b	{	123 0x7b
NP	12 0x0c	FS	28 0x1c	,	44 0x2c	<	60 0x3c	L	76 0x4c	\	92 0x5c	l	108 0x6c		124 0x7c
CR	13 0x0d	GS	29 0x1d	-	45 0x2d	=	61 0x3d	M	77 0x4d	]	93 0x5d	m	109 0x6d	}	125 0x7d
SO	14 0x0e	RS	30 0x1e	.	46 0x2e	>	62 0x3e	N	78 0x4e	^	94 0x5e	n	110 0x6e	~	126 0x7e
SI	15 0x0f	US	31 0x1f	/	47 0x2f	?	63 0x3f	O	79 0x4f	_	95 0x5f	o	111 0x6f	DEL	127 0x7f



## 条件分岐命令 conditional branch

beq \$t1,\$t2,L1

■ \$t1と\$t2が等しければL1に分岐し、そうでなければ次の命令を実行する。

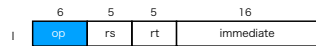
■ (\$t1-\$t2=0) ならばL1に分岐する。

bne \$t1,\$t2,L1

■ \$t1と\$t2が等しくなければL1に分岐し、そうでなければ次の命令を実行する。

■ (\$t1-\$t2≠0) ならばL1に分岐する。

beq/bneはI形式、相対アドレス



■ beqのopコード 8<sub>10</sub>=(001000)<sub>2</sub>

if (R[rs]==R[rt])  
PC=PC+4+BranchAddr

■ bneのopコード 9<sub>10</sub>=(001001)<sub>2</sub>

if (R[rs]!=R[rt])  
PC=PC+4+BranchAddr

■ BranchAddr=

{14{immediate[15]}}, immediate, 2'b0}

▶ 4倍, immediate<<2

## if-else文

■ Cステートメント

```
if (i == j) f = g + h ;  
else f = g - h ;  
▶ f-j:$s0-$s4
```

■ MIPSコード (bneを使う)

```
bne $s3,$s4,Else  
add $s0,$s1,$s2  
j Exit # Exitへジャンプ  
Else: sub $s0,$s1,$s2  
Exit:
```

■ j命令 ジャンプ命令

▶ 無条件分岐 unconditional branch

■ MIPSコード (beqを使う)

```
beq $s3,$s4,Then  
sub $s0,$s1,$s2  
j Exit # Exitへジャンプ  
Then: add $s0,$s1,$s2  
Exit:
```

## While文のコンパイル

■ Cステートメント

```
while ( save[i]==k)  
i += 1;  
▶ 配列save[]のベースアドレス: $s6  
▶ f-j:$s0-$s4
```

■ Cステートメント

```
▶ while文からif文とgoto文  
Loop:if(save[i]!=k) goto Exit;  
i=i+1;  
goto Loop  
Exit:
```

■ MIPSコード

```
Loop: sll $t1,$s3,2  
add $t1,$t1,$s6  
lw $t0,0($t1)  
bne $t0,$s5,Exit  
addi $s3,$s3,1  
j Loop  
Exit:
```

■ MIPSコード (最適化)

```
beq $zero,$zero,Entry  
Loop: addi $s3,$s3,1  
Entry:sll $t1,$s3,2  
add $t1,$t1,$s6  
lw $t0,0($t1)  
beq $t0,$s5,Loop  
Exit:
```

## slt(set on less than) 命令

■ `slt $t0,$s3,$s4`

- ▶ `$s3 < $s4` のとき, `$t0`に1を設定
- ▶ そうでないとき, `$t0`に0を設定
- ▶ `$s3 >= $s4`のとき, `$t0`に0を設定

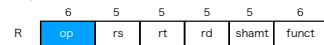
■ `slti $t0,$s2,10`

- ▶ `$s2 < 10` のとき, `$t0`に1を設定
- ▶ そうでないとき, `$t0`に0を設定
- ▶ `$s2 >= 10`のとき, `$t0`に0を設定

■ `slt`

▶ R形式 Q/2a

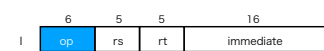
▶  $R[rd] = (R[rs] < R[rt]) ? 1 : 0$



■ `slti`

▶ I形式 a

▶  $R[rd] = (R[rs] < \text{SignExtImm}) ? 1 : 0$



## 整数値の条件判定

■ `slt`と`beq`/`bne`の組合せで, すべての条件判定 (6通り) を生成することができる.

▶ `$zero`は値0のレジスタ.

■ `beq $s1,$s2,L1 # $s1 == $s2 のときL1`

■ `bne $s1,$s2,L1 # $s1 != $s2 のときL1`

■ `slt $t0,$s1,$s2`

`bne $t0,$zero,L1 # $s1 < $s2 のときL1`

■ `slt $t0,$s1,$s2`

`beq $t0,$zero,L1 # $s1 >= $s2 のときL1`

■ `slt $t0,$s2,$s1`

`bne $t0,$zero,L1 # $s1 > $s2 のときL1`

■ `slt $t0,$s2,$s1`

`beq $t0,$zero,L1 # $s1 <= $s2 のときL1`

実際のコンパイラでは`$t0`ではなくて`$at`が使われる.

## jr(jump register)命令

■ `jr $t0`

▶ `$t0`の内容のアドレスにジャンプする.

■ `$s0`は, 0から3の値をとる.

▶ ジャンプ・アドレス表のアドレス: `$t4`

```
sll $t1,$s0,2
add $t1,$t1,$t4
lw $t0,0($t1)
jr $t0
```

ジャンプテーブル	
<code>\$t4</code> →	L0 アドレス
<code>\$t4+4</code> →	L1 アドレス
<code>\$t4+8</code> →	L2 アドレス
<code>\$t4+12</code> →	L3 アドレス

■ ジャンプ先のコード

```
L0:add $s0,$s3,$s4
j Exit
L1:add $s0,$s1,$s2
j Exit
L2:sub $s0,$s1,$s2
j Exit
L3:sub $s0,$s3,$s4
Exit:
```

## switch-case文 (1)

■ 次のCコードをMIPSコードに変換せよ。

▶ f=k: \$s0-\$s5

```
switch (k) {
  case 0: f = i + j;
          break;
  case 1: f = g + h;
          break;
  case 2: f = g - h;
          break;
  case 3: f = i - j;
          break;
}
```

■ case文に対応するMIPSコード

▶ case文はラベルに対応するので、case0からcase3を、それぞれラベルL0からL3に対応づける。

▶ kに応じてL0からL3にジャンプすれば良い

```
L0:add $s0,$s3,$s4
    j Exit
L1:add $s0,$s1,$s2
    j Exit
L2:sub $s0,$s1,$s2
    j Exit
L3:sub $s0,$s3,$s4
Exit:
```

## switch-case文 (2)

■ switch文に対応するMIPSコード

```
slt $t3,$s5,$zero # Test if k < 0
bne $t3,$zero,Exit
slli $t3,$s5,4    # Test if k < 4
beq $t3,$zero,Exit # if k >=4,goto Exit
sll $t1,$s5,2
addi $t1,$t1,$t4
lw $t0,0($t1)
jr $t0
L0:add $s0,$s3,$s4
    j Exit
L1:add $s0,$s1,$s2
    j Exit
L2:sub $s0,$s1,$s2
    j Exit
L3:sub $s0,$s3,$s4
Exit:
```

ジャンプテーブル

\$t4 →	L0 アドレス
\$t4+4 →	L1 アドレス
\$t4+8 →	L2 アドレス
\$t4+12 →	L3 アドレス

## 関数（手続き）呼び出し

```
main{
  int x;
  ...
  x = leaf_example(1,2,3,4);
  ...
}
int leaf_example( int g, int h, int i, int j)
{
  int f;
  f = ( g + h ) - ( i + j );
  return f;
}
```

1. 実引数をレジスタに設定

2. 関数に制御を移す

3. 関数に必要なメモリを確保

4. 関数の実行

5. 戻り値を設定

6. 制御を戻す

関数呼び出しの手順

■ 6つの手順

- ① 引数をレジスタ（\$a0～\$a3）に置く
- ② 関数に制御を移す（jal命令, \$ra）
- ③ 関数の実行に必要なメモリをスタック上に確保する
- ④ 関数の本体を実行する
- ⑤ 返回值（関数値）をレジスタ（\$v0）に置く
- ⑥ 制御を呼出し元に戻す（jr \$ra #returnに相当）

■ レジスタの割当て

- ▶ \$a0～\$a3：実引数（arguments）
- ▶ \$v0～\$v1：返回值(values for results and expression evaluation)
- ▶ \$ra：戻りアドレスアドレス（制御を戻すアドレス）（return address）

j命令では関数呼び出しに対応できない

```
100 j 300
104 addi $s0,$s0,1
...
200 j 300
204 addi $s1,$s1,1
```

- 関数の開始アドレスは300
- 100番地から関数を呼び出したとき、戻り番地は104番地になる。
  - ▶ 320番地は j 104 となる。
- 200番地から関数を呼び出したとき、戻り番地は204番地になる。
  - ▶ 320番地は j 204 となる。
- 関数を呼び出す番地で、戻り番地が異なるので、j命令は使えない。
  - ▶ jr命令を使えばよいが、戻り番地をどのようにレジスタに設定するか？

jal命令

```
100 jal 300
104 addi $s0,$s0,1
...
200 jal 300
204 addi $s1,$s1,1
```

- jal命令 jump and link
  - ▶ リンク 戻り番地を\$raに設定する。
- 100番地から関数を呼び出すと \$ra=104
- 200番地から関数を呼び出すと \$ra=204
- 制御を戻すには、jr \$ra とすればよい。